

この園長だより「にこにこ」では、皆さんがにこにこ「笑顔」になることを願いながら、日頃の子どもたちの様子や、私が自分の子育てを振り返って今感じていることなどをお伝えしていきます。

もう一人の自分

我が息子が幼い頃のことです。悪いことをしたので叱ると、「あれは、もう一人の〇〇（自分）がやったんだ。」と言ったことがありました。こちらは、頭に血が上っているところでしたが、はぐらかすようなことを言うので、驚き呆れて、力が抜けてしまいました。「じゃあ、もう一人の〇〇に伝えて。お母さんは、とても悲しいし、やめてほしい。」すると、息子は、「分かった。言うておくね。」と言いました。そして、少ししてから私のところに来て、「言うてきたよ。もうやらないって。」とのこと。私が、「本当は、ごめんなさい。と言うてほしかった。」と伝えると、息子は、「ごめんなさいって言うていたよ。」と言うのです。今振り返ると、息子は「もう一人の自分は、分かっている。」というような言い方でしたが、反省はしていたようです。

子どもを叱る場面では、つかつかとなつて怒ることもあるかと思えます。しかし、感情のまま怒っても、子どもには、なかなか伝わらないものです。また、「ちゃんとして。」「きちんとやって。」「一生懸命にやって。」などの抽象的な言葉で言いがちですが、「どのように」ということがないと、分かりにくいものです。

「①よくないことは何で、②その理由は何か。③今後はどうしたらよいか。」という具体的なことを伝えないと、ただ怒られて「怖かった」というような反応になりがちです。たくさんのことを言いたくなるのは親心ですが、上記の①②③を、「短い言葉でシンプルに。」を心にとめて伝えることが大切です。

「怒る」は、親の気持ち、「叱る」は、やったことの振り返り、「注意する」は、これからを導くことです。「怒る」が長いと、何で叱られているか分かりづらくなります。親からたたかれれば、悪いことが何かよりも痛い思いだけになり、さらに他の人へもたたくことを覚えてしまうため、これはしつけではありません。

案外子どもは、「なりたい自分像」があるものです。頭ごなしに怒るよりも、「いつもは優しいのに、間違えちゃったね。」「この前できていたことを思い出してね。」「本当は、こうしたほうがいいと分かっているよね。」など、「もう一人の自分」に気付かせる伝え方とともに、「あなたのことを信じていますよ。」という温かなまなざしが、子どもの心に響くことでしょう。また、「何がしたかったのか。」子どもの声を聴くと、悪いことをした理由が分かることがあります。子どもの思いは受け止めながらも、「こうした方が良かったね。」と、望ましい方法を具体的に知らせるとよいでしょう。そのためには、親も深呼吸して、「何を伝えたいのか。」を整理していくとよいですね。

また、求めていることが難しかったり、やるべきことが分からなかったりすることで、叱る場面があります。少し簡単にしたり、見て分かるような工夫をすることも、叱らずに済む手立てとなります。

そうは言っても、怒ってしまうことがあるかもしれません。そんな時は、「さっきは、ちょっと言い過ぎたかな。」と親も子どもの前で素直な気持ちを表すとよいと思います。親も「もう一人の自分」に気付いて伝えていくやり取りは、自分のことを客観的に見つめ直す大切さを示す機会にもなり、コミュニケーションのモデルになります。

さて、先日職場体験に来た中学生が、最後の反省会の中で、「職場体験は、給料が出ませんが、子どもたちの笑顔が給料だと思いました。」と言いました。親業も同じですね。

夏休みが始まります。お子さんとの生活が、笑顔あふれる毎日になりますように。